モノレールストーリー
夏の終わりの物語
吉成 庸子

夏の終りは何故かも悲しい。

優子はこの季節になるといつもそう思うのだった。東京の山の手で生まれ、六才年上の兄がいる。優子の父は三年前優子が二十七才の時、他界してしまった。優子が結婚して一年余り過ぎた時だった。

優子は、女子大を出てから商社に勤めていた。秘書課勤務だった。父もサラリーマンだったが早くから役員になっていて、優しい母と兄の四人での生活はいつも明るく幸せに満ちていた。

兄の哲也は銀行員、大学の同級生と結婚して四才になる男の子がいた。父亡き後は母と一緒に暮らしてくれているので、優子は安心していられた。

優子は、会社の上役の紹介で見合い結婚したのだが、今ではこの結婚は失敗だと思うしかなかった。背が高く、なかなかのハンサム。家柄も良く、サラリーマンとしても未来は明るいらしい。

結婚が決まった時、だれからも「いい人と結婚できて幸せだねえ」と言われた。優子だってそう思っていたのだ。女はかりの学校生活だったせいかボーイフレンド一人いなかった。だから優子の結婚は、家族中を安心させ喜ばせたのだった。

夫の家で結婚祝いだと言い、千葉に新居を買ってくれた。千城台という、緑が豊かな住宅街だった。

東京へは四十分ないう便利さを気にいっていた。五十坪の土地の上に赤い屋根のおとぎ話に出てくる様な可愛い二階建ての家は、前庭もかなりあって優子はさっそくいろんな花を植えて美しい花壇を作った。専業主婦となった優子は夫の喜ぶ料理作りと、庭の手入れが一番の楽しみとなり、自分でも幸せだと思う毎日だった。

ところが丁度結婚一年目を迎えた午後、突然その幸せは破れてしまった。たしかあれは金曜日の午後だった。急に四十才前後に見えるあかぬけした女の人が訪ねて来て、いきなり「あなたが弘ちゃんの奥さん？」と言った。「え、そうですが」と、とまどいながら答える優子に「ふーん、やっぱり彼好みの清純派美人だわね」と言った後「ちょっと貴女に話があるのよ。あがらせてもらうわね」といきなり玄関を入ってくるのだった。

なにがなんだかわからず一応、応接間に通して、紅茶を運んで戻った優子に「これで水は「私は貴女のご主人、弘ちゃんの永年の恋人よ。彼がまだ学生の頃からのつき合いだから、かれこれ十年以上前からの仲よ。私と結婚する筈だったのよ。だから彼とは別れて頂戴。弘ちゃんだって私との約束忘れてない筈よ。くわしいことは彼に聞いて頂戴。私もこれ以上待たないからね」そう言い放ち、彼女は名刺をおいて帰っていった。名刺によると彼女は銀座の「さぎさんか」というバーのママで「美雪」という名前らしい。

優子は何がなんだかわからず、ただ弘の帰るのを待った。八時に帰宅した弘の夕食が済むのを待って、今日、美雪と言う女性が訪ねて来て離婚して欲しいと言われたとの話だった。

彼はさして驚いた様子は見せず「とうとう来たか。気にするな」とだけ言う。「そんなあなた、あの方は一度は別れるべきだ。とおっしゃっていましたよ」優子の言葉に「アイツとはそうなるかなあ、だけど君が心配することはないよ。僕が愛していたのは君だけだ」と言った。

優子はこの言葉に救われた。

弘はかえって開き直る感じで帰宅も遅くなってきた。優子がひと言でも文句めいた言葉を口にすると「君には充分生活費も渡してあるだろう。これ以上何の不満があるんだ。僕の父なんかずっと二号がいたよ。母は知っていても知らん振りで通していた。僕はアイツには経済的な援助は一つもしていない。この位のこと何でもないじゃないか！」と言い張る夫に、優子は絶望するしかなかった。

そんな中、父は他界してしまった。なお実家の人達には話せなくなってしまった。最近は近じゃあの「美雪」と言う女は、直接電話をかけてきて「いつ別れるの？」などと言うのに…。どうしたらいいのだろう。一人悩む日々が続いていった